

藥

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫



亮るあかい月は日の出前に落ちて、寝静まった街の上に藍甕あいがめのような空が残った。

華老栓からうせんはひよつくり起き上つてマツチを擦り、油じんだ燈盞とうさんに火を移した。青白い光は茶館の中の二間ふたまに満ちた。

「お父さん、これから行つて下さるんだね」

と年寄つた女の声が出た。そのとき裏の小部屋の中で咳嗽せきの聲が出た。

「うむ」

老栓は応えて上衣うわぎの釦ぼたんを嵌はめながら手を伸ばし

「お前、あれをお出しな」

華大媽かたいまは枕の下をさぐつて一包つつみの銀貨を取出し、老栓に手渡すと、老栓はガタガタ顫ふるえて衣套かこしの中に収め、著物きものの上からそつと撫でおろしてみた。そこで彼は提灯ちようちんに火を移し、燈盞を吹き消して裏部屋の方へ行つた。部屋の中には苦しそうな嘖むせび声こゑが絶えまなく続いてしたが、老栓はその響ひびきのおさまるのを待つて、静かに口をひらいた。

「小 栓、お前は起きないでいい。店はお母さんがいい按摩にする」

「……………」

老栓は倅が落著いて睡っているものと察し、ようやく安心して門口を出た。

街なかには黒く沈まり返って何一つない。ただ一条の灰白の路がぼんやりと見えて、提灯の光は彼の二つの脚をてらし、左右の膝が前になり後になりして行く。ときどき多くの狗に遇ったが吠えついて来るものもない。天氣は室内よりもよほど冷やかで老栓は爽快に感じた。何だか今日は子供の昔に還つて、神通を得て人の命の本体を掴みにゆくような気がして、歩いているうちにも馬鹿に気高くなつてしまった。行けば行くほど路がハツキリして来た。行けば行くほど空が亮るくなつて来た。

老栓はひたすら歩みを続けているうちにたちまち物に驚かされた。そこは一条の丁字街がありありと眼前に横たわっていたのだ。彼はちよつとあと戻りしてある店の軒下に入った。閉め切つてある門に靠れて立つてみると、身体が少しひやりとした。

「ふん、親爺」

「元氣だね……………」

老栓は喫驚して眼を睜つた時、すぐ鼻の先きを通つて行く者があつた。その中の一人

は振向いて彼を見た。かたちははなはだハッキリしないが、永く物に餓えた人が食物たべものを見つけたように、攫つかみ掛つて来そうな光がその人の眼から出た。老栓は提灯を覗いて見るともう火が消えていた。念のため衣套をおさえてみると塊りはまだそこにあつた。老栓は頭かしらを挙げて両側を見た。気味の悪い人間が幾つも立っていた。三つ二つ、三つ二つと鬼のような者がそこらじゅうにうろついていた。じつと瞳すを据えてもう一度見ると別に何の不思議もなかつた。

まもなく幾人か兵隊が来た。向うの方にいる時から、著物の前と後ろに白い円い物が見えた。遠くでもハッキリ見えたが、近寄つて来ると、その白い円いものは法被はっぴの上の染め抜きで、暗紅色あんこうしよくのふちぬいの中にあることを知つた。一時足音がざくざくして、兵隊は一大群衆に囲まれつつたちまち眼の前を過ぎ去つた。あすこの三つ二つ、三つ二つは今しも大きな塊りとなつて潮うしおのように前に押寄せ、丁字街の口もとまで行くと、突然立ち停まつて半円状むらがに簇むらつた。

老栓は注意して見ると、一群の人は鴨の群れのように、あとから、あとから頸くびを延ばして、さながら無形の手が彼等の頭を引張つているようでもあつた。暫時静かであつた。ふと何か、音がしたようでもあつた。すると彼等はたちまち騒さわぎ出してがやがやと老栓の立

つている処まで散らばった。老栓はあぶなく突き飛ばされそうになった。

「さあ、銭と品物の引換えだ」

身体じゆう真黒な人が老栓の前に突立つて、その二つの眼玉から抜劍ぬきみのような鋭い光を浴びせかけた時、老栓はいつもの半分ほどに縮こまった。

その人は老栓の方に大きな手をひろげ、片ツぽの手に赤い饅頭まんじゅうを撮つまんでいたが、赤い汁は饅頭の上からぼたぼた落ちていた。

老栓は慌てて銀貨を突き出しガタガタ顫えていると、その人はじれったがって

「なぜ受取らんか、こわいことがあるもんか」

と怒鳴った。

老栓はなおも躊躇ちゆうちよしてしていると、黒い人は提灯を引ほろたくって幌ほろを下げ、その中へ饅頭を詰めて老栓の手に渡し、同時に銀貨を引ひつつか掴んで

「この老おいぼれ耄め」

と口の中でぼやきながら立去った。

「お前さん、それで誰の病気をなおすんだね」

と老栓は誰かにきかれたようであったが、返辞もしなかった。彼の精神は、今はただ一

つの包パオ（饅頭）の上に集つて、さながら十世じっせ単伝たんてんの一人子ひとりごを抱いだいているようなものであつた。彼は今この包パオの中の新しい生命を彼の家に移し植えて、多くの幸福を収め獲えたのであつた。太陽も出て来た。彼のめのまえには一条の大道だいどうが現われて、まっすぐに彼の家まで続いていた。後ろの丁字街の突き当たりには、破れた匾額へんがくがあつて「古亭口こていこう」の四つの金文字きんもじが煤すす黒く照らされていた。

## 二

老栓は歩いて我家わがやに來た。店の支度はもうちゃんとして出来ていた。茶卓は一つ一つ拭き込んで、てらてらに光つていたが、客はまだ一人も見えなかつた。小栓は店の隅すみの卓子テーブルに向つて飯を食つていた。見ると額ひたいの上から大粒の汗がころげ落ち、左右の肩骨が近頃めつきり高くなつて、背中にピタリとついてゐる夾襖あわせの上に、八字の皺しわが浮紋うきもんのように飛び出してゐた。老栓はのびてゐた眉まゆ宇がしを思わず顰しかめた。華大媽かまじは竈かまどの下から出て来て唇を顫ふるわせながら

「取れましたか」

ときいた。

「取れたよ」

と老栓は答えた。

二人は一緒に竈の下へ行つて何か相談したが、まもなく華大媽は外へ出て一枚の蓮の葉を持つてかえり卓テーブルの上に置いた。老栓は提灯の中から赤い饅頭を出して蓮の葉に包んだ。

飯を済まして小栓は立上ると華大媽は慌てて声を掛け

「小栓や、お前はそこに坐すわつておいで。こつちへ来ちやいけないよ」

と吩咐いいつけながら竈の火を按排した。その側そばで老栓は一つの青い包つつみと、一つの紅白の破れ

提灯を一緒にして竈の中に突込むと、赤黒いほのおが渦を巻き起し、一種異様な薰りが店の方へ流れ出した。

「いい匂いだね。お前達は何を食べているんだえ。朝ツぱらから」

駝背せむしの五少爺ごだんなが言った。この男は毎日ここの茶館に来て日を暮し、一番早く来て一番遅く帰るのだが、この時ちようど店の前へ立ち往来に面した壁際のいつもの席に腰をおろした。彼は答うる人がないので

「炒り米のお粥かね」

と訊き返してみたが、それでも返辞がない。

老栓はいそいそ出て来て、彼にお茶を出した。

「小栓、こつちへおいで」

と華大媽は倅を喚び込んだ。奥の間のまんなかには細長い腰掛が一つ置いてあつた。小栓はそこへ来て腰を掛けると母親は真黒な円いものを皿の上へ載せて出した。

「さあお食べ——これを食べると病気がなおるよ」

この黒い物を撮み上げた小栓はしばらく眺めている中に自分の命を持つて来たような、いうにいわれぬ奇怪な感じがして、恐る恐る二つに割ってみると、黒焦げの皮の中から白い湯気が立ち、湯気が散つてしまうと、半分ずつの白い饅頭に違いなかつた。——それがいつのまにか、残らず肚の中に入つてしまつて、どんな味がしたのだがまるきり忘れていると、眼の前にはただ一枚の空皿が残つているだけで彼の側には父親と母親が立っていた。二人の眼付は皆一様に、彼の身体に何物かを注ぎ込み、彼の身体から何物かを取出そうとするらしい。そう思うと抑え難き胸騒ぎがしてまた一しきり咳嗽込んだ。

「横になつて休んで御覽。——そうすれば好くなります」

小栓は母親の言葉に従つて咳嗽入りながら睡つた。

華大媽は彼の咳嗽の静まるのを待つて、ツギハギの夜具をそのうえに掛けた。

## 三

店の中には大勢の客が坐つていた。老栓は忙しそうに大薬罐おやかんを提げて一さし、一さし、銘々のお茶を注いで歩いた。彼の両方の眶まぶたは黒い輪に囲まれていた。

「老栓、きようはサツパリ元気がないね。病気なのかえ」

と胡麻塩ひげの男がきいた。

「いいえ」

「いいえ？　そうだろう。にこにこしているからな。いつもとは違う」

胡麻塩ひげは自分で自分の言葉を取消した。

「老栓は急がしいのだよ。悴のためにね……」

駝背の五少爺がもつと何か言おうとした時、顔じゆう瘤こぶだらけの男がいきなり入つて来た。真黒まっくろの木綿著物——胸の釦はすを脱して幅広の黒帯をだらしなく腰のまわりに括くくりつけ、入口へ来るとすぐに老栓に向つてどなつた。

「食べたかね。好くなつたかね。老栓、お前は運氣がいい」

老栓は片ツ方の手を葉罐に掛け、片ツぼの手を恭々しく前に垂れて聴いていた。華大媽もまた眼のふちを黒くしていたが、この時にこにこして茶碗と茶の葉を持って来て、茶碗の中に橄欖の実を撮み込んだ。老栓はすぐにその中に湯をさした。

「あの包は上等だ、ほかのものとは違う。ねえそうだろう。熱いうちに持つて来て、熱いうちに食べたからな」

と瘤の男は大きな声を出した。

「本当にねえ、康おじさんのお蔭で旨く行きましたよ」

華大媽はしんから嬉しそうにお礼を述べた。

「いい包だ。全くいい包だ。ああいう熱い奴を食べれば、ああいう血饅頭はどんな癆症にもきやく」

華大媽は「癆症」といわれて少し顔色を変え、いくらか不快であるらしかつたが、すぐにまた笑い出した。そうとは知らず康おじさんは破れ鐘のような声を出して喋りつづけた。あまり声が大きいので奥に寝ていた小栓は眼を覚ましてさかんに咳嗽はじめた。

「お前の家の小栓が、こういう運氣に当たってみれば、あの病気はきつと全快するにちがひ

ない、道理で老栓はきようはにこにこしているぜ」

と胡麻塩ひげは言った。彼は康おじさんの前に言つて小声になつて訊いた。

「康おじさん、きよう死刑になつた人は夏家の息子だそうだが、誰の生んだ子だえ。一体なにをしたのだえ」

「誰つて、きまつてまさ。夏四かしナイナイの子さ。あの餓鬼め」

康おじさんはみんなが耳みみたぶ朶たぶを引立てているのを見て、大に得意になつて瘤かたまりの塊かたまりが八チ切れそうな声を出した。

「あの小わツばめ。命が惜しくねえのだ。命が惜しくねえのはどうでもいいが、乃公おれは今度ちつともいいことはねえ。正直のところ、引ツ剥べがした著物まで、赤眼の阿義あぎにやつてしまった。まあそれも仕方がねえや。第一は栓じいさんの運氣を取逃がさねえためだ。第二は夏三爺かだんなから出る二十五両の雪白シユバシユバの銀をそっくり乃公おれの中きんちやく著の中に納めて一文もつかわねえ算段だ」

小栓はしつしつと小部屋の中から歩き出し、両手を以て胸を抑おさえてみたが、なかなか咳嗽たせがとまりそうもない。そこで竈の下へ行つてお碗わんに冷飯ひやめしを盛り、熱い湯をかけて喫たべた。

華大媽はそばへ来てこつそり訊ねた。

「小栓、少しは楽になったかえ。ヤツぱりお腹なかが空くのかえ」

「いい包パオだ。いい包パオだ」

と康おじさんは小栓をちらりと見て、皆みなの方に顔を向け

「夏三爺はすばしツこいね。もし前に訴え出がなければ今頃はどんな風になるのだろう。

一家一門は皆殺されているぜ。お金！——あの小わツぱめ。本当に大それた奴だ。牢に入られても監守に向つてやつぱり謀叛むほんを勧めていやがる」

「おやおや、そんなことまでもしたのかね」

後ろの方の座席にいた二十余にじゅうりの男は憤慨の色を現わした。

「まあ聴きなさい。赤眼の阿義が訊問にゆくとね。あいつはいい気になって釣り込もうとしゃがる。あいつの話では、この大清だいしんの天下はわれわれの物、すなわち皆みなの物だというのだ。ねえ君、これが人間の言葉と思えるかね。赤眼はあいつの家にたった一人のお袋お袋があることを前から承知している。そりや困つてにはちがいないが、搾り出しても一滴の油が出ないので腹を欠いているところへ、あいつが虎の頭を搔いたから堪らない。たちまちポカポカと二つほど頂戴したぜ」

「義哥は棒使いの名人だ。二つも食つたら参つちまうぜ」

壁際の駝背がハシヤギ出した。

「ところがあの馬の骨め、打たれても平気で、可憐そうだ。可憐そうだ、と抜かしやがるんだ」

「あんな奴を打つたつて、可憐そうも糞もあるもんか」

胡麻塩ひげは言った。

康おじさんは彼の穿きちがえを冷笑した。

「お前さんは乃公の話がよく分らないと見えるな。あいつの様子を見ると、可憐そうというのは阿義のことだ」

聴いていた人の眼付はたちまちにぶつて来た。小栓はその時、飯を済まして汗みずくになり、頭の上からポツポツと湯気を立てた。

「阿義が可憐そうだつて——馬鹿々々しい。つまり気が狂つたんだな」

胡麻塩ひげは大にわかつたつもりで言った。

「気が狂つたんだ」

と、二十余りの男も言った。

店の中の客は景気づいて皆高笑いした。小栓も賑やかな道連れになって懸命に咳嗽をした。康おじさんは小栓の前へ行つて彼の肩を叩き

「いい包だ！ 小栓——お前、そんなに咳嗽いてはいかんど、いい包だ！」  
「気狂いだ」

と駝背の五少爺も合点して言つた。

#### 四

西関外の城の根元に靠る地面はもとの官有地で、まんなかになつ歪んだ斜かけの細道がある。これは近道を貪る人が靴の底で踏み固めたものであるが、自然の区切りとなり、道を境に左は死刑人と行倒れの人を埋め、右は貧乏人の塚を集め、両方ともそれからそれへと段々に土を盛り上げ、さながら富家の祝いの饅頭を見るようである。

今年の清明節は殊の外寒く、柳がようやく米粒ほどの芽をふき出した。

夜が明けるとまもなく華大媽は右側の新しい墓の前へ来て、四つの皿盛と一碗の飯を並べ、しばらくそこに泣いていたが、やがて銀紙を焚いてしまうと地べたに坐り込み、何か

待つような様子で、待つと言つても自分が説明が出来ないのでぼんやりしていると、そよ風が彼女の遅れ毛を吹き散らし、去年にまさる多くの白髪しらがを見せた。

小路こみちの上にまた一人、女が来た。これも半白はんぱくの頭で檻樓ぼろの著物の下に檻樓ぼろの裙はかまをつけ、壊れかかった朱塗しゆぬりの丸籠を提げて、外へ銀紙のお宝を吊し、とぼとぼと力なく歩いて来たが、ふと華大媽が坐っているのを見て、真蒼まつさおな顔の上に羞恥の色を現わし、しばらく躊躇ちゆうちゆしていたが、思い切つて道の左の墓の前へ行つた。

その墓と小栓の墓は小路こみちを隔てて一文字いちもんじに並んでいた。華大媽は見てみると、老女は四皿のお菜さいと一碗の飯を並べ、立ちながらしばらく泣いて銀紙を焚いた。華大媽は「あの墓もあの人の息子だろう」と気の毒に思っていると、老女はあたりを見廻し、たちまち手脚を顫わし、よろよろと幾歩か退しりぞいて眼を睜おそつて、れた。その様子が傷心のあまり今にも発狂はつきちやうしそうなので、華大媽は見かねて身を起し、小路こみちを跨いで老女にささやいた。

「老ラオナイナイ、そんなに心を痛めないでわたしと一緒にお帰りなさい」

老女はうなずいたが、眼はやツぱり上ずつていた。そうしてぶつぶつ何か言った。

「あれ御覽なさい。これはどういふわけでしょうかね」

華大媽は老女のゆびさした方に眼を向けて前の墓を見ると、墓の草はまだ生え揃わない

で黄いろい土がところ禿げしてはなはだ醜いものであるが、もう一度、上の方を見ると思はず喫驚びつくりした。——紅白の花がハッキリと輪形わがたになつて墓の上の丸い頂きをかこんでいる。

二人とも、もういい年配で眼はちらついているが、この紅白の花だけはかえつてなかなかハッキリ見えた。花はそんなにも多くもなくまた活気もないが、丸々と一つの輪をなして、いかにも綺麗にキチンとしている。華大媽は彼女の倅の墓と他人の墓をせわしなく見較べて、倅の方には青白い小花がポツポツ咲いていたので、心の中では何か物足りなく感じたが、そのわけを突き止めたくはなかった。すると老女は二足三足、前へ進んで仔細に眼をとおして独言ひとりごとを言つた。

「これは根が無いから、ここで咲いたものではありません——こんなところへ誰がきましようか？ 子供は遊びに来ることが出来ません。親戚も本家も来るはずはありません——これはまた、何としたことでしょうか」

老女はしばらく考えていたが、たちまち涙を流して大声上げて言つた。

「瑜ちゃん、あいつ等はお前に皆罪みなをなすりつけました。お前はさぞ残念だろう。わたしは悲しくて悲しくて堪りません。きようこそここで靈験をわたしに見せてくれたんだね」

老女はあたりを見廻すと、一羽の鴉からすが枯木かれぎの枝に止まっていた。そこでまた喋り始めた。「わたしは承知しております。——瑜ちゃんや、可憐かわいそうにお前はあいつ等の陷穽かんせいに掛つたのだ。天道様てんとうさまが御承知です、あいつ等にもいずれきつと報いが来ます。お前は静かに冥ねむるがいい。——お前は果はたして、しんじつ果はたしてここにいるならば、わたしの今の話を聴取することが出来るだろう——今ちよつとあの鴉をお前の墓の上へ飛ばせて御覧」

そよ風はもう歇やんだ。枯草かれくさはついついと立っている。銅線のようなものもある。一本が顫え声を出すと、空気の中に顫えて行つてだんだん細くなる。細くなって消え失せると、あたりが死んだように静かになる。二人は枯草かれくさの中に立って仰向いて鴉を見ると、鴉は切立きつたての樹の枝に頭を縮めて鉄の鑄物いもののように立っている。

だいぶ時間がたった。お墓参りの人がだんだん増して来た。老人も子供も墳つかの間あいだに出没した。

華大媽は何か知らん、重荷を卸したようになって歩き出そうとした。そうして老女に勧め

「わたしどもはもう帰りましようよ」

老女は溜息吐ついて不承ふしょう々々ぶしょうに供物くもつを片づけ、しばらくためらっていたが、遂にぶら

ぶら歩き出した。

「これはまた、何としたことでしょうか」

口の中でつぶやいた。二人は歩いて二三十歩も行かぬうちにたちまち後ろの方で

「かあ」

と一声叫んだ。

二人はぞつとして振返つて見ると、鴉は二つの翅をひろげ、ちよつと身を落して、すぐにまた、遠方の空に向つて箭のように飛び去った。

(一九一九年四月)



# 青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴↓あいつ 或↓ある 却つて↓かえつて 屹度↓きつと 呉れ↓くれ 此処↓ここ  
此↓この 宛ら↓さながら 暫く↓しばらく 即ち↓すなわち 其↓その 只↓ただ  
忽ち↓たちまち 丁度↓ちようど 一寸↓ちよつと て仕舞つた↓てしまった 尚お↓な  
お 筈↓はず 甚だ↓はなはだ 又・亦↓また 未だ↓まだ 丸切り↓まるきり 若し↓  
もし 矢ツ張り↓やツぱり 余程↓よほど」

※底本内には「燈」と「灯」が混在していますが、そのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（加藤祐介）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年5月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 薬 魯迅

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>